



三井高棟（左）・高公（右）



高棟夫人苞子（中央右）・高公夫人銀子（中央左）

昭和8年 相続報告祭における三井高棟・高公両夫妻

口 絵 昭和八年 相統報告祭における三井高棟・高公両夫妻

口絵は、北三井家から三井文庫に寄贈された一六ミリ・テーブから切り出したものである。当該テーブには、三井高棟・高公および両夫人、随行の人々と神職たちの行列が、カメラ位置を変えて二シーン映されている。日付等からみて、昭和八年に京都下鴨の顕名霊社において、高棟の引退および高公の襲爵を祖霊に報告した際の映像であり、祭祀が終わって一行が退出する様子を、まず鳥居の内側から、続いて中門の外側から、撮影したものとみられる。口絵のカットは、いずれも一つ目のシーンのものである。

昭和七年の団琢磨暗殺後、高棟は高公への社長交替を考えるようになり、同族会の同意を得、宮内省に届け出て許可されたのち、昭和八年三月三十一日、高棟は北家の家督を高公に譲り、八郎右衛門名前を返上、替って高公が男爵を襲爵した。あわせて三井合名会社社長・三井家同族会議長も、高棟から高公に替わった。

この年の一〇月、高棟・高公と両夫人は、隠居および襲爵を先祖の霊に報告するため上京した。まず一〇月一七日に顕名霊社において、翌一八日には菩提寺である真如堂（真正極楽寺）において、隠居・襲名を報告する行事を執り行った。口絵上段に映る高棟はこの時満七六歳、高公は三八歳。口絵下段に映る高棟夫人・苞子は旧富山藩主前田利聲の長女で、六三歳、高公夫人・銀子は侯爵松平康莊（越前松平家）の長女で、三二歳。苞子の日記によれば、高棟・高公はフロックコートに高帽、苞子・銀子は黒の裾模様様の袷紋付に並丸帯のいでたちで、いずれも正装であった。

なお、顕名霊社は三井家の祖霊を祭神とし、近世中期に京都の木嶋社の境内におかれたことに始まる。明治四二（一九〇九）年、油小路北家邸から下鴨に遷座され、独立した神社となった。現在、顕名霊社の跡地には京都家庭裁判所があり、霊璽は東京向島の三囲神社にある。

（村和明）